

アマテール神の御世に詠まれた

フトマニの百二十八歌がわかる本（解説）

△<sub>中</sub>○<sub>中</sub>○<sub>中</sub> 田 △<sub>中</sub>○<sub>中</sub>

フトマニの歌

アマテール神の御世に詠まれた

フトマニの百二十八歌がわかる本（解説）

△<sub>中</sub>○<sub>中</sub>○<sub>中</sub> 田 △<sub>中</sub>○<sub>中</sub>

フトマニの歌

はじめに

フトマニとは占いのことであり、アマテルカミ(神)の占いのことです。アマテル神が、お住まいに成られている香具宮では桜の枝葉がしぼむため、心配されたアマテル神はフトマニで占うように勅りされました。すると、天の原に異変を知らせる「シチリ」の掛が出たのです。その頃、出雲ではオオナムチが栄華を極めて大きな社に住んでいたのです。このことが発端となり、古代の一大事とされる出雲の「国譲り」に発展して行ったのです。このように、アマテル神のフトマニは国家の一大事、異変や世相を占うための手法として用いられておりました。

このアマテル神のフトマニを記述する<sup>○</sup>系(ヲシテ)文献には、他に(注1)ホツマツタエ、ミカサフミが存在します。だが、唯一、占いを記述した文献はフトマニのみになります。古の元を辿ればアマテル神が八百万神に作らせたと伝えられ、現在に残されたフトマニは、ホツマツタエの二九〇アヤ(綾)を編纂されたスエトシ(オオタタネコ)の手によりスメラギ(天皇)に上奏されたと伝えられている文献の写本です。そして、この度、フトマニの解説を行うに当たり、滋賀県高島市勝野の旧家・野々村家所蔵の野々村立蔵写本「神刺基兆傳太占書紀」(以後、フトマニと呼ぶ)をご使用させて頂くことにしました。また、使用に当たって

は、当写本を管理されておられます現当主の野々村直大氏のご承諾を戴きました。この甲斐があつて、長年の悲願であつた「フトマニ」の解説に拍車がかかりホツマツタエで解説する「フトマニの歌」本を発表させて頂くことになりました。当歌本の構成としては、秋の夜長をヲシテ原文でフトマニを楽しみたい方のために、(1)原文(○系・ヲシテ表記)を掲載しております。次に、筆者の解説も覗いて見たい人のために、(2)〜(4)カナ表記、直訳文、解説を掲載しております。堪能して戴ければ幸甚と思えます。

また、当歌本を発表する以前の平成19年7月1日付にて『フトマニ考「検証ホツマツタエ32号(2007年8月)』』において、「件名 ニマトフ (二間を飛ぶ)の法則が示すフトマニの語源」を発表させて頂いておりました。更に、平成27年7月1日には、長年の研究が実って「フトマニの占い方法の再考(吉田説)」を発表させて頂いておりました。

なお、当フトマニの歌本では、ヲシテ学を学問の基本としているため、「神刺基兆傳太占書紀」本のヲシテ原文のみを引用し、漢字文は省略させて頂いて戴いております。

吉田六雄

平成29年4月4日 横浜の自宅にて

(注1) ホツマツタエとは、

ホツマツタエは、紀元前1000年頃(縄文・後期)〜紀元262年頃(古墳・前期)までのアマカミ(天神)、アマキミ(天君)、スメラギ(天皇)の歴史・文化をヲシテ(オシテ)文字にて、今に伝える古文獻です。また、現在に残される写本は、五七調にて、法呈文、1〜40アヤ(綾)の全1万行の10万文字にも及ぶ大作です。編者は、1〜28アヤ(綾)までをワニヒコ(クシミカタマ、ウガヤ時代のツルギ大臣)、後半の29〜40アヤ(綾)までをスエトシ(オオタタネコ、景行天皇時代の三輪の臣)になります。

(注1) 写本

・四卒<sup>㊦</sup>卒<sup>㊧</sup>卒<sup>㊨</sup>卒<sup>㊩</sup> 秀眞政傳紀(和仁佑安謄本)

・四卒<sup>㊦</sup>卒<sup>㊧</sup>卒<sup>㊨</sup>卒<sup>㊩</sup> ほつまつたゑ 上下(編著者 鎭邦男)

(注1) アワの歌 四十八文字

ヲシテ(文字)	カナ文字	ヲシテ(文字)	カナ文字
㊦ 凡△㊧㊨	アイウエオ	㊦ 爪△㊧㊨	ハヒフヘホ
㊦ 𠂇△㊧㊨	カキクケコ	㊦ 𠂇△㊧㊨	マミムメモ
㊦ 𠂇△㊧㊨	サシスセソ	㊦ 𠂇△㊧㊨	ヤヰユエヨ
㊦ 𠂇△㊧㊨	タチツテト	㊦ 𠂇△㊧㊨	ラリルレロ
㊦ 𠂇△㊧㊨	ナニヌネノ	㊦ 𠂇△㊧㊨	ワヲン